

これが地方分権化に干渉・有名無実化するものとして反発。地域社会は、これが地方政府に益するだけで、地域社会に利益をもたらさないとして反発。

(森林政策ワークショップから編集, 2000年9月)

図書紹介.....

◎アジア・アメリカ生態資源紀行 山田 勇著, 329頁, 岩波書店, 東京, 2000年12月刊行, 定価2,200円

本書は、歩くことは考えることであるという態度を実行してきた著者が、熱帯林における生態研究の現場の中で、そこに住む人との係わりあいぐあいに強く惹かれ、森林生態系の構成物及び景観など総体で再生可能な資源を、著者は生態資源と呼び、その観点から様々な地域における旅の記録をまとめられたものである。

本書は3部から成り立っている。第1部は東南アジアの生態資源では、地域の各種熱帯林の生態基盤を論じ、この地域での人々と生態資源のかかわり、さらに大型、中型、小型、景観などの代表的な生態資源の管理への人たちの対応を述べている。第2部では南北アメリカと中国における生態資源では、スミソニアン自然博物館の仕組みや中米の息の長いデータの収集に努力している現状を紹介し、次いでベネズエラ・アマゾン、エクアドルのエコツーリズムを例に、研究と教育に支えられたアマゾンとアンデスの景観資源の問題を論じている。さらに、洞窟に住む人々や文化生態村を例として中国雲南の森と人を紹介している。第3部の日本からの発信では、現地保全、現地外保全など遺伝資源保全の道を紹介し、最後に生態資源への対応と行方を論じている。

これらは、いずれも生態資源と人間とのかかわりあいを解明し、その問題点を探り出そうとする著者によって、現場の生活が生き生きと描き出されており、単なる紀行文ではなく、読む人に大きな感動と現場での視点を与えてくれる。熱帯地域で生態資源にかかわる技術協力や研究に携わる方、地域での人たちの生活向上に努力している方など多くの人たちに、現場を踏むときの自覚と視点を教えてくれるだけに、是非読んでいただきたい好書である。

(加藤亮助)